魔法少女リリカルなのはStrikerS～疾風の銃使い～

霞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～疾風の銃使い～

【Ｎコード】

Ｎ５３６８Ｚ

【作者名】

霞月

【あらすじ】

機動六課に地上本部から派遣されることになった”鳴神海人”と”鳴神加奈”。２人は本局嫌いとして非常に有名だった。そんな２人と機動六課が織りなす物語。全ての鍵は戦闘機人が握る……。

ａｃｔ．０（前書き）

はじめまして霞月と言います。

小説を書くのは初めてですが一生懸命やらせていただきます。うまくはないですが感想をいただけると嬉しいです。

act. 0

重苦しい空気が流れる中、八神はやては自分の目の前に表示されている資料を見ながらクロノ・ハラオウンと通信していた。

「はやて、僕が送った資料はもう見たか？」

「今目を通したとこや。」

はやてが見ている資料にはある2人の局員について書かれていた。名前、年齢、階級、魔導師ランク、戦闘スタイル、経歴など、2人についてありとあらゆるデータがそこには載っていた。

はやてはそれを見て難しい顔をしてクロノにある疑問を投げかける。

「クロノ君、なんで今頃になってこないなことになったんや……。」

あと1週間で自分が夢見た部隊が始動できるのに、なんで今頃になって新しく局員を入れなければならないのか。

本来であれば戦力が増えるのは非常に嬉しいのだが、資料に載っている2人については話が違った。

「すまない。地上本部からの文句を少しでも減らすためにはこれしかなかったんだ。」

クロノはすまなさそうな表情でそう言った。いや、そう言うしかなかった。

本局に勤めているはやてが地上本部の管轄内に部隊を置くことで地上本部から文句が出るのは分かっていた。

しかし地上本部からの文句は予想以上に酷く、このままでは部隊が始動しても監査が頻繁にはいり仕事どころではなくなってしまうと

ころだった。

それを回避するために地上本部から局員を六課に招き入れることになったのだが…。

「だからってよりによってこの2人はないやろ……。」

その招き入れることになった局員に問題があった。先程も言った通り戦力が増える分には良いのだが、招き入れることになった2人について言えば話は別。

はやてが見ている資料に載っている2人は本局嫌いとして非常に有名で、はやて自身も何度が仕事で一緒になったが全く相手にされなかったのだ。

「僕にとっても予想外だよ。地上本部の方で局員を決めることになっていたが、まさかその2人が出てくるとは……。」

クロノ自身も何度か仕事を一緒にやったことはあるがはやて同様相手にされず、むしろ扱いははやてよりも酷く、コケにされていた。

だからこの2人が出てきたときは信じられなかった。本局嫌いであることからこの2人がわざわざそんなことをするとは思えなかった。何があろうともこの2人なら今回の話を受けないと思っていた。

「しゃあない。この2人が来るってことが先に分かっただけでも良しとしよか。当日になって知るより、先に分かったる方がこっちも動きやすいし。」

はやてはそれを察して気持ちを切り換えるためにこれからのことを話し合おうとする。クロノははやてのその様子に少しだけ罪悪感が生じるが、これ以上言っても何も変わらないためはやてのそれに応じる。

そして2人は話し合うべく今一度資料に目を移す。そこにははっきりと分かりやすい文字で2人の局員の名前が書かれていた。

”鳴神海人二等陸佐”

”鳴神加奈少将”

ａｃｔ．０（後書き）

とりあえず最初はこんな感じです。
今回は”海斗”と”加奈”は名前しか登場しませんでしたが、次回からは普通に登場する予定です。

act. 1（前書き）

遅くなりましたが2話目です
相変わらずですがご覧ください

act. 1

機動六課で式典が行われている頃、２人の男女が六課に向かってゆっくり歩いていた。

男性の方は１８０?近くはある長身で、体つきはがっしりとはいかないまでもかなりしっかりしていた。髪は黒く、前髪で目が隠れてしまうくらい長かった。

一方女性の方も１７０?はあり、体つきはスラッとしている。髪はこちらも黒く、腰の辺りまであった。

「姉さん、なんでこんな仕事引き受けたんだよ……。」

男性は恨めしいそうな目で女性を見るが、女性も今回の仕事には納得がいかないようで、

「私だってこんな仕事受けたくない。でもレジアスさんからの依頼だから仕方ないだろ。」

不機嫌な声でそれに答えながら、男性をキツい目で睨みつける。しかし男性はそれに怯むことなく女性を見続ける。

が、いつまでも女性を見ていても仕方ないと思ったのか、ポケットから煙草を取り出して火をつける。

「それにしても姉さん、もう式典が始まってる時間だけどこんなにゆっくりしてて良いのか？」

そのまま4、5分近く歩いていると男性が唐突に質問を投げかける。すでに式典が始まってから15分近くは経っている。早いところであればそろそろ式典が終わっている頃なのだ。それにもかかわらず2人はまだ着く様子はなく、遅れているということを気にせずにゆっくり歩いていたのだ。

しかし女性は何を今更という風に溜め息をつくと気だるそうな声をあげる。

「それを君が言うのはどうかと思うが、別に気にする必要はない。本局の奴らに従う気はないし、何を言われようとも私たちには関係ない。」

「それもどうかと思うんだけど……。」

女性の言葉に男性は苦笑いを浮かべるが男性も早く行くつもりはないようで、先程と変わらずゆっくりと歩いていた。

特に話すこともなく、そのまま歩き続けること約２０分。ようやく２人は機動六課にたどり着いた。

真新しい隊舎を見て２人は顔をしかめる。普通の隊舎よりも金がかかっているのは明白であり、しかもそれを出しているのは地上本部。地上本部が作った部隊であれば問題はないのだが、あくまでもこの部隊は本局が作ったもの。それにもかかわらず地上本部が金をだすことになっていたのだ。

どの位の予算を出したかは知らないが、これは明らかに金をかけ過ぎていると言えるような作りだった。

「姉さん、これは報告すんの？」

「一応報告はする。だがこれについては本部の方でも確認しているはずだ。」

男性はカメラで隊舎を撮りながら女性に確認すると、女性はすでにモニターを展開し報告書を作成していた。

その後も2人は直ぐに部隊長室に向かうことなく、隊舎の周りを観察し、明らかに金をかけ過ぎている部分を探していく。

ある程度外装を見て周り、そろそろ訓練場をみて中に移ろうしたとき、2人の目の前には2人の女性が現れた。

「お前ら何もんだ。」

赤毛で小さな女性、いや、少女が2人を睨み付けながら問いかける。
しかし2人はそれを無視して訓練場に向かおうとする。

「無視しないでもらおうか、鳴神少将と鳴神二等陸佐。」

それを見て赤毛の少女が2人に掴みかかろうとすると、桃色の髪を一本に纏めている女性が2人に声をかける。

それを聞いて赤毛の少女は2人の階級に驚くが、女性は気にすることなく歩いていき、男性は立ち止まり2人の方へ振り向く。

「一体何の用だ、二等空尉。俺たちは今仕事中なんだが。」

男性は鋭い目つきで2人を睨みつけるが、先程の女性もそれに負けないような鋭い目つきで彼を睨み返していた。

「鳴神二等陸佐、仕事と言うのであればまずは部隊長に挨拶に行くのが筋であろう。」

「なぜ俺たちが挨拶に行かなければならない。こっちはわざわざこんな糞部隊に出向いてやってるんだぞ。それだけでも感謝してもらいたいもんだ。」

男性の言葉を聞き2人は表情を険しくし、何かあれば襲いかからんとする雰囲気を出していた。

しかし男性はそれを見ても怯むことはなく、軽蔑するような目で2人を見始める。

「おいおい、お前らはこの部隊の状況が分かってないようだな。俺たちが来なければ仕事どころじゃねぇんだぞ。」

「それは分かってる。だがこの部隊で働くならば、まずは部隊長に挨拶に行くのが筋だと言っている。」

女性は上官である男性にイライラを隠せず、言葉を投げつける。

それを聞いて男性は溜め息をつき、モニターを出し何かを入力していく。そして入力が終わるとモニターをしまい、話すことはないと言わんばかりに2人に背を向ける。

それを見て赤毛の少女は自分のデバイスを起動しようとするが、

「おい、何しようとしてんだ。」

男性は一瞬で姿を消し、いつの間にかデバイスを起動してそれを少女の頭に突きつけていた。

その動きを見て、少女はもちろん、女性すらも驚きを隠せずに固まってしまった。何か変な動きを見せれば直ぐにでも引き金を引くと言わんばかりの雰囲気を男性が醸し出す中、２人は動けずにただじっと男性が動くのを待っていた。

「今回は大目に見てやる。」

そう言って男性はデバイスをしまうと、２人を置いてその場から歩いていく。

そして少し歩いていくと、訓練場の直ぐ近くの木に一緒に来ていた女性が訓練場を見ながら寄りかかっていた。

女性は男性に気づくと顎で訓練場を指し、男性に訓練場を見るように指示をだす。男性はそれに従い訓練場を見る。

「おいおい、こりゃないだろ……。」

男性は訓練場を見て驚きを隠せなかった。通常の部隊では有り得ない程の設備が整っていたのだ。これがベテランが集う部隊があれば別なのだが、機動六課のような主に新人が訓練場を使うような部隊では有り得なかった。

この訓練場を作るのに一体いくらかけたのか。そんなことを考えながら男性は訓練場の様子を写真におさめていく。

「姉さん、、一応こっちは終わったぞ。」

「そうか。ならば早く中の様子を見て、使えない本局の奴に挨拶にいくぞ。」

女性は男性が作業を終えたのを見ると訓練場に背を向け、男性はそれを見て苦笑いを浮かべその場を後にする。

それから約1時間後、2人は隊舎の中も見終え部隊長室へと向かっていた。その2人の顔は難しいもので、機動六課には現時点で多くの問題点があることを示していた。

それもそのはず。医務室で使われていた機材を除いて、機動六課では試験部隊で使われるレベルをゆうに超えていた。

「鳴神加奈少将だ。入るぞ。」

「鳴神海斗二等陸佐。入らせてもらう」

2人は部隊長室の前に着くとノックもせず、名乗るだけで部屋に入っていく。中では部隊長である八神はやてが書類を纏めていた。

「な、何ですか急に!?」

「使えない本局の奴にわざわざ挨拶しに来てやったのだ。」

はやては急な2人の来訪に驚きの声を上げるが、加奈はそんなことは気にしないでやって来た理由を告げる。

海斗はその様子を呆れ顔で眺めるが姉である加奈と同じ気持ちなのか、はやての対応に密かに溜め息をついていた。

「だからってノックもしないで急に入ってくることはないと思うんですが。」

「こちらから出向いてやっただけでも感謝して欲しいものだ。」

はやては急に入ってきた2人の行為に異議を唱えるが、加奈はそれすらも聞かず、二言、三言告げるとその場から立ち去ってしまった。

その様子に海斗は再び溜め息をついく。そして加奈の様子に固まっ

ているはやてに声をかける。

「八神、久しぶりだな。相変わらず冴えない頭してんだな。」

「そういう海斗君やて相変わらず礼儀をわきまえてないんやな。」

海斗が軽くはやてをけなすと、はやてもそれに応じて海斗を軽くけなす。

そのやり取りはいつもやっているような感じが滲み出ており、2人は笑いながらやっていた。

「ふん。嫌いな本局の奴に礼儀なんかいらねぇだろ。」

「その本局嫌いも相変わらずなんやな。」

「当たり前だ。とりあえず本部での会議が終わり次第姉さんから話

があるみたいだから覚悟しておけ。」

それを聞いてはやては顔をしかめるが、海斗はそれを無視して部隊長室を後にする。

act. 1（後書き）

今回はこんな感じです。
とりあえず近いうちに海斗と加奈のプロフィールを作成しようと思います。

キャラクター紹介（前書き）

今回は2人のオリジナルキャラクターの紹介です。

キャラクター紹介

オリジナルキャラクター1

―名前―
鳴神（ナルカミ）　海斗（カイト）

―年齢―
20

―階級―
二等陸佐

―魔導師ランク―
陸戦S＋

―魔力光―
淡い緑色

―魔力変換資質―
疾風

―容姿―
身長は182?、体つきはがっしりとはいかないまでもしっかりとしている。髪は前髪が長く、下ろした状態だと目が隠れてしまう程。仕事時は後ろに流しているか。額の上辺りで1つに纏めている。

―詳細―
銃型のデバイスを使う者としては異例の高速戦闘を主体とする魔導師。その移動速度は驚異的で、管理局でも5本の指に入ると言われている。

また本局嫌いとして有名であり、任務で一緒になることがあっても本局の局員を無視して任務を遂行する程。しかし彼1人でも難なく任務をこなす為、本局としては文句を言いたくとも言えない状況である。彼がなぜ本局を嫌うのかは謎である。そんな彼だが、これも何故だかは分からないが八神はやて二等陸佐とはそれなりに仲が良いようだ。

仕事の面では姉である鳴神加奈少将の補佐官を務めており、常に鳴神少将の傍らには彼の姿がある。彼個人であらゆる任務に参加することもあるが、基本的には鳴神少将の指揮下での任務に参加している。

趣味は珈琲を飲みながら本を読むこと。その為非番の日はミッド市街の喫茶店でよく目撃されている。

使用デバイス

―名前―
ウルフファング

―種類―

インテリジェントデバイス

―形態―

待機：銀の十字架のイヤリング

第１形態：ツインフォルム（双銃）

銀色の二丁拳銃。平均的な銃型のデバイスと比べると倍近くの処理速度を持つ

第２形態：ガルムフォルム（ガトリング）

銀色のガトリング。海斗と同じ位の大きさがあり、移動速度が少し落ちてしまう。その代わり毎秒５０発の魔力弾を打ち出すことが可能で、非常に高い攻撃力を誇る。

第３形態：ファングフォルム（双剣）

銀色の双剣で、剣身を海斗の魔力で包んでいる。海斗が持つ唯一の近接戦闘用の形態。切れ味は簡単に鉄を切り裂く程。

フルドライブ：フェンリル（？？？）

一切使われた記録がない為、存在するか分からない。しかし本人がこの形態があることを口にしているのを聞いている局員が多い為、存在する確率は低くはないもよう。

オリジナルキャラクター2

―名前―
鳴神（ナルカミ）　加奈（カナ）

―年齢―
25

―階級―
少将

―魔導師ランク―
陸戦ＳＳ＋

―魔力光―
淡い青色

―容姿―
身長は１７１?、すらっとした体つきでスタイルも極めて良い訳ではないがとても整っている。髪は黒く、腰の辺りまであり、戦闘時には首の辺りで１本に纏めている。

―詳細―
銃型のデバイスを使用し、幻術を中心とした戦闘スタイルをとっている。その幻術は右に出る者など居ないと言われる程。

鳴神二等陸佐同様に本局嫌いで有名であり、共同任務では本局を無視して鳴神二等陸佐に先行させ、自らも現場に出ることで速やかに

事態の終息をはかる。それも本局が文句を言えない程鮮やかに。鳴神二等陸佐同様、本局を嫌う理由は不明。

仕事の面では非常に優秀であり、レジアス中将に認められている。彼女が指揮をとる任務はすべて3日以内に終わると言われており、事実3日以内に終わらなかったことはほとんどない。しかも3日に終わらなかった任務はいずれもSSランク任務であり、鳴神二等陸佐と共に解決に当たり、遅くとも2ヶ月以内に終わらせている。

趣味は訓練であり、非番の日は訓練場で目撃されることが多い。

使用デバイス

―名前―

クロウ・ウィング

―種類―

インテリジェントデバイス

―形態―

待機：シルバーリング

第1形態：モード・デュアル（双銃）

黒い二丁拳銃。銃型デバイスの中では最高の処理速度を誇る。

第2形態：モード・スナイプ（狙撃銃）

黒い狙撃銃。弾速は管理局最速を誇り、弾の貫通力も凄まじい。この形態であれば打ち抜けない障壁はないと言われる程。

第３形態：モード・スピア（槍）
約２ｍはある黒い槍。加奈がもつ唯一の近接戦闘の手段。穂先は加奈の魔力でうっすらと包まれており、非常に高い貫通力を誇る。

フルドライブ：ダークウィング
過去に１度だけ使用記録があり、それを目撃している局員がいるにも関わらず、一瞬で敵を倒してしまった為にその姿は謎に包まれている。

キャラクター紹介（後書き）

２人についてはこんな感じです。
次の更新は早くても夕方頃になる予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5368z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜疾風の銃使い〜

2011年12月19日02時48分発行